

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

物質と聖性：人文学諸分野からのアプローチ：
共同研究：
モノをとおしてみる現代の宗教的世界の諸相

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-04-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 古沢, ゆりあ メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009408

共同研究 ● モノをとらえてみる現代の宗教的世界の諸相(2017-2019年度)

本共同研究は、モノやイメージといった非言語的要素から現代の宗教の展開を捉えようとするものである。キリスト教、仏教、イスラーム、ヒンドゥー教、民俗宗教を対象に、文化人類学、美術史学、歴史図像学、民族音楽学、環境社会学などの分野の研究者が、モノを通して今日の宗教の諸相について比較検討している。

本稿では、第1～3回の研究会について報告したうえで今後の展望を述べる。なお、本共同研究の一部は『月刊みんぱく』2018年7月号の特集「モノに願いを」でも紹介されているので、あわせて参照されたい。

隣接分野の知の動員

本共同研究は、上述のようにモノへのアプローチが異なる隣接分野の研究者からなる。

たとえば、文化人類学と美術史学を比較してみると、次のような相違が指摘できる。研究代表者の八木百合子(国立民族学博物館)によると、文化人類学においては「人」に焦点をあてるためモノは副次的な存在とされ、宗教研究では物質より精神を重視する傾向が強いためか、宗教的なモノに特化した研究はまだ少ない。一方、筆者が専門とする美術史学では、モノである美術作品は中心的な研究対象である。そのなかでも宗教建築、礼拝像や説話画などを含む宗教美術は、西洋美術史におけるキリスト教美術、日本東洋美術史における仏教美術として、重要な部分を占めてきた。モノを教義や思想の下位のものともみなすよりも、モノと信仰が相互に影響を与え合いながら発展してきたとらえている。

また、両分野においては宗教的なモノに対して異なる意味づけと序列づけがなされている。文化人類学では、聖像、宗教画、呪具などを信仰の対象とする一方、祭具、音具、宗教構造物などは単に儀礼の装置とみなされてきたという。それに対し美術史学では、作家論・作品論が中心的で、いわゆる巨匠の傑作、様式・流派の重要作品が重視されるのに対して、無名の作者による垂流・傍流の作品は副次的で、さらには大衆的な造形物は対象外にされる傾向が近年まで強かった。また、西洋美術においては、建築、彫刻、絵画、工芸の順に序列があり、建築を中心として彫刻や絵画が、図像プログラムとして総合的に宗教空間を構成し教義を視覚化しているにとらえる。

なお、宗教的なモノを単に「美術品」とみなすことは、有名な教会堂に見学者が押し寄せ教会側が迷惑する例のように、その宗教の担い手にとっての価値

と、芸術作品、文化財、観光資源としての価値との間に軋轢を生じることがある。これは宗教的なモノをめぐる問題のひとつといえる。

以上の文化人類学と美術史学の例のように、研究分野ごとに強みと蓄積がある一方で、対象や枠組みに違いがあるため、共同研究することでより多角的なアプローチができると思う。

同一宗教における地域性

キリスト教は世界中に信者を有し普遍宗教ともいわれるが、内実は教派、地域、見解の違いなどによりかなり多様である。第1回の研究会(2018年1月20～21日)では、キリスト教カトリックの事例として、在日ベトナム系カトリック信徒(野上恵美、神戸大学)、ペルーにおける聖像をめぐる実践(八木)、フィリピンにおける聖画像崇敬(古沢)、イタリアの巡礼地アッシジのアッシジ刺繍(笠井みぎわ、総合研究大学院大学)についての報告が行われた。

野上によると、インドシナ難民らベトナム系信徒が半数を占める日本のある教会で、ベトナム系信徒が巨大なマリア像を設置しようとしたところ、日本人信徒は「偶像崇拜を助長する」と言って反対した。妥協案として、信仰の対象ではなく「多文化共生」のシンボルとしてキリスト像を設置することになったが、目立つ場所に設置したいというベトナム系信徒に対して、日本人信徒は隅の目立たない場所でもよいと主張した。この事例からは、ベトナム系信徒と日本人信徒の宗教的なモノへの態度の違いがみえてくる。



祝祭で目抜き通りを巡行するサント・ニーニョ像。華やかな山車が100台以上続く(2012年1月、フィリピン・マニラ、古沢ゆりあ撮影)。



聖フランチェスコと聖キアラーのモチーフのアッジジ刺繍が施されたポップ (2016年12月、イタリア・アッジジ、笠井みぎわ撮影)。

また、スペインの植民地時代にカトリック化が進んだペルーとフィリピンとは、個人や家族が所有する聖像を大切に世話し、服や持ち物で着飾らせ宗教行事に持参するなどの共通点がある。しかし、地域ごとで特有の実践もみられる。たとえば、ペルーのクスコでは幼子イエス(ニーニョ)像を着飾らせ、聖誕祭や公現祭に教会に持ち寄り司祭の祝福を受ける習慣がある。一方、フィリピンでは、幼子イエス(サント・ニーニョ)は、1月の第3日曜日を中心に行なわれる祝祭で、像を載せた山車の巡行、仮装や踊りのパレードによって祝われる。

そうした信仰心や宗教実践と結びついたモノも、外部とのかかわりの中で変化していくことがある。その1つが、笠井が報告したイタリアのアッジジ刺繍の事例である。聖フランチェスコの生地アッジジでは、アッジジ刺繍が信仰と結びついた手仕事だという認識がある一方で、近年では観光客の好みに合わせて安価で小さい土産物としてのポップリやしおりが多く作られるようになっている。

モノと人との相互関係

宗教的なモノが生み出され変化する背景には、社会的、歴史的要因がある。第2回の研究会(2018年5月19日)で鳥谷武史(金沢大学)は、日本の中世社会と弁才天の図像に着目して、描かれた持物の変化を論じた。弁才天は、伝来当初は国土を災いから守護する神として信仰されたため、さまざまな武器を手にして描かれていたが、やがて個人の利益や救済の即物的な願いに対応するようになると、持物が宝珠、蔵の鍵、米俵などの福德具に変化したのである。

同様に、福内千絵(関西学院大学)は、ヒンドゥー教の宗教画において、19世紀後半から画家ラヴィ・ヴァルマーが西洋油彩画の表現方法を取り入れて考案した神話主題の作品が印刷により大量生産・商品化されたことを指摘し、その中でサリー姿のサラスヴァティー(弁才天)の図像が人気を博し広く流布した事例を挙げた。このように、ある尊格の図像は不変ではなく、それぞれの時代の要請に応じて変化していくのである。

また、人間の宗教的なモノに対する態度もさまざまである。八木によると、ペルーでは、何らかの理由でニーニョ像を維持できなくなった持ち主が、それを見ず知らずの人に託すことがある。第3回の研究会(2018年10月26日)でニツ山達朗(平安女学院大学)は、チュニアのイスラームにおけるクルアーン・カレンダーにクルアーンの章句が書かれているため、人びとはそれを破棄できないという事例を報告した。こうした事例からは、宗教的なモノを粗末に扱えないという心情を指摘できる。一方、田村うらら(金沢大学)の研究によると、トルコのイスラームの



工具屋で2000年から捨てずに重ねて貼り続けられているクルアーン・カレンダー (2017年8月、チュニア・ドゥーズ、ニツ山達朗撮影)。

礼拝用絨毯は用具としての機能が重視され、簡単に処分、買い替えがなされる。それは聖性を帯びない、礼拝対象ではない道具としての絨毯である。

今後の展望

研究会を重ね以上のような事例と論点が出たことをふまえ、次の段階への発展を目指す過程で、私たちの側の無意識の前提や枠組みも検討すべき課題としてみえてきた。

たとえば、精神は物質の上位にあるとする、モノと精神を二分する思考自体が近代プロテスタント的な枠組みだという指摘がある(杉本 2014)。こうしたモノと精神の二項対立的な図式自体を相対化する必要がある。また、共同研究のメンバーたちは、人は宗教的なモノに対してありがたい・粗末にできないという気持ちを抱くだろうと想像し、そうした心情に共感する傾向にあった。そこには、モノの供養やお焚き上げなどの習慣がある日本の文化的背景に影響された、私たち論じる側のモノ観が投影されているかもしれない。

モノの定義、範疇も再考されるべき課題である。これまでに取り上げたのは、図像や文字など思想や物語の入れ物としてのモノや、何かを表象するよりも機能を主体とする器物が主であった。それらだけでなく、空間など物理的ではあるが明確には区切れないもの、飲食物・香りなど変化したり形をもたなかったりするもの、モノを介した儀礼と人間の身体性、さらには現代において宗教領域での活用もめざましい電子データやインターネットなど、対象を多様な領域に広げ検討していきたい。

【参考文献】

杉本良男編 2014『キリスト教文明とナショナリズム—人類学的比較研究』東京：風響社。

ふるさわ ゆりあ

滋賀県立近代美術館学芸員。専門は芸術学、近現代美術史。植民地美術、キリスト教美術および聖画像崇敬を研究。共著書に『フィリピンアートみちくさ案内マニラ編』(フィリピン・アート・ガイドブック・プロジェクト 2013年)、分担執筆に『美術—植民地文化を超えて』大野拓司・鈴木伸隆・日下涉編著『フィリピンを知るための64章』(明石書店 2016年)などがある。